51 期　令和 5 年度春季大会兼関東大会予選

ベンチメンバーはキャプテン・部長が選出する。
怪我や不調に苦しんだが、チームのために尽力した#28 玉木と#2 水野が今大会にエントリー。
特出した個人技がなくとも、声を出し身体を張り、チームプレイで貢献した。

51 期の春季大会兼関東大会のスターティング 5。

令和５年３月から新体制として活動し、新たなスタイルを構築してきた 51 期。

チーム 1 のハードワーカーとして、プレイのみならずオフコートでも模範となったキャプテン#48 榎本。
彼の姿勢は、同期や先輩後輩から一目おかれるだけではなく、指導者側も敬意を払う。
榎本が指名した 52 期キャプテン#6 土屋は「亜蓮さんを超えたい」と宣言し、新チームを率いている。

栃木県宇都宮市から東大和に憧れて入学し、3 年次にエースガードとして覚醒した#15 中尾。
入学時は F だったが PG にコンバートし、東大和高校の新しい武器であるドライブで
コートの端から端までを切り裂いた。
「宇都宮から東大和に憧れて入学する人もいると知ってほしい」とは引退式の言葉。

ヤマト係として円陣を担当した、元気印#23 早津は、169cm ながら C のポジションを担う。
低身長ゆえにシュートブロックこそできないものの、体を当てたディフェンスや、エリアを奪取する身体でゴール下の主導権を握った。左写真を見れば身長差が理解できるだろう。適材適所という言葉がピッタリ。

#14 村山はエントリーメンバーで最長身ながら、SF として内外で活躍する。
飛び込みリバウンドと 1~4 番までを守れるストッパーとして、長いリーチを活かして躍動した。
ベンチエリアではムードメーカーとしても雰囲気をやわらげる、おちゃめな一面も。

ベンチエリアと応援席の勢いは、「応援の東大和」として伝統になっていた。コロナ禍以降、復活している。

ベンチ外のメンバーは応援のみならず、試合配信や実況解説で貢献する。
自分たちの試合が気になるところだが、写真奥はスカウティングで勝ち上がりの対戦相手を撮影中。
「謙虚で好かれるチーム」という伝統を大切にしている東大和高校の魅力の一面。

巧みな技術はないと自覚し、泥臭いプレイと正しい人間性・組織を追究した部長#47 髙橋（大）。
積極的にチームメイトに声をかける。東大和高校の伝統を体現し、チームの要として多大な貢献をした。
ベスト 8 という目標は達成できなかったものの、バトンは 52 期部長#4 滝坂に受け継がれた。

チーム一のリバウンダーであり、空中アーティスト#35 岩崎。
自身も上背はないが、制空権というチームの弱点を補うために体を張り、ことごとくをカバーした。
力強いリングアタックで観客を魅了しつつ、プレイ外では部員同士をつなぐ中継役としても働いた。

持ち味の負けず嫌いを活かし、エースの看板を背負った#0 黒川。
苦しい場面の打開やゲームエンドでボールを預かり、チームをここぞの得点で助け、自分の仕事を全うした。
入学時は心技体いずれも粗削りだったものの、最終学年時では人間として成長した場面を垣間見せた。

1 年次に B チームだった#44 北村。7：30 からの朝練と、チーム練習後に外部でまた個人練習を続けた。
最終学年では運動量の激しさとコーナースリーで起爆剤となり、ゲームチェンジャーとして起用された。
朝練担当#21 髙橋（優）とともに、B チーム這い上がり組は、努力型の希望の星として後輩の見本となった。

左写真の中央は、苦しい時間帯でもベンチから声を張り上げる#11 東。彼も努力型。

2 年生ながら要所で起用された、シュート力が魅力の#5 篠原。
今シーズンはフィジカルレベルアップとオフボールディフェンスに意識的に取り組んでいる。

ファウルを受けた#44 北村に駆け寄る#14 村山と#15 中尾。
フロアに転んだ選手に駆け寄り、手を差し伸べて起こしてやろう、というカルチャー。
ディフェンス練習のメニュー内で、ルーズボールに飛び込んだチームメイトの起こし方まで練習している。

応援席から声を張り上げる 53 期。ノリと勢いは東大和高校の魅力の一部で、すでに浸透している様子。
公式戦前には OB が応援練習として、伝統の継承を手助けしてくれている。

試合後には応援席、画面の向こう側の保護者・OBOG・学校関係者に感謝を伝えた。
「謙虚で好かれるチーム」として、礼を尽くす大切なシーン。

写真提供　内田　初音さん